



復 本 一 郎 先 生 近 影

## 著作を中心とする復本一郎先生略年譜

昭和十八年（一九四三）（〇歳）

九月五日、愛媛県宇和島市元結掛九十四番地に生まれる。  
父、岩見（二十八歳）、母、清子（二十三歳）。父は、神奈川大学事務局長、常務理事として昭和四十九年（一九七四）七月十二日没、享年五十九（菩提寺は、宇和島市の仏海禅寺）。母は、健在（八十八歳）。

昭和二十五年（一九五〇）（七歳）

四月一日、横浜市立磯子小学校入学。父の仕事の関係で、昭和二十三年（一九四八）、五歳の時に横浜市磯子区磯子町二百七十八番地に転居したことによる。

昭和二十八年（一九五三）（十歳）

九月一日、横浜市神奈川区栗田谷十四番地への一時的転居にともない横浜市立青木小学校に転校。三ヶ月後、今の住所、横浜市港北区篠原町九百三十六番地（後、篠原東二丁目二十四番地二十一に住所表示変更）に転居。

昭和三十一年（一九五六）（十三歳）

三月三十一日、横浜市立青木小学校卒業。  
四月一日、横浜市立栗田谷中学校入学。

昭和三十四年（一九五九）（十六歳）

三月三十一日、横浜市立栗田谷中学校卒業。  
四月一日、神奈川県立横浜翠嵐高等学校入学。この年の第一回文芸コンクールで、詩入選（タイトル「日記」）。これが高等学校時代の唯一の出来事。時の校長は、神奈川県教育界の重鎮佐田稔先生。

昭和三十七年（一九六三）（十九歳）

三月三十一日、神奈川県立横浜翠嵐高等学校卒業。  
四月一日、早稲田大学第一文学部文学科国文学専修入学。

昭和四十一年（一九六六）（二十三歳）

三月三十一日、早稲田大学第一文学部文学科国文学専修卒業。

四月一日、早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻修

士課程入学。

六月一日、第二文学部の副手となる。これにより、大学院在籍中は、授業料を免除される。

九月三十日、院生を中心とした研究雑誌「文芸と批評」第二巻第二号に「芭蕉俳諧に於ける「さび」を寄稿。百七枚（四百字詰）の卒業論文を三十枚程度にまとめた最初の論文のごときもの。当時、岡山大学法文学部助教授赤羽学氏が著書『芭蕉俳諧の精神』（昭和四十五年十一月、清水弘文堂書房刊）の中で、この「さび」論について触れ、評価して下さる。

#### 昭和四十四年（一九六九）（二十六歳）

三月三十一日、早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻修士課程修了（文学修士）。修士論文は「「さび」考——「さびし」の肯定としての芭蕉への道程——」四百三十枚（四百字詰）。

四月一日、早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程入学。

#### 昭和四十五年（一九七〇）（二十七歳）

五月十日、高等学校教諭一級普通免許（国語）取得。

十月四日、長野県南佐久郡出身の新津陽子（二十二歳）と結婚。三人の男子（寅之介、隆司、文人）誕生。長男、次

男は福岡で、三男は静岡で誕生。

#### 昭和四十七年（一九七二）（二十九歳）

三月三十一日、早稲田大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。

四月一日、福岡教育大学助手（文部教官教育職（一）四等級七号俸）に採用される。初任給、七万八千五百円也。福岡県粕屋郡古賀町久保の官舎に転居。昭和四十八年（一九七三）、講師、四十九年、助教授。福岡での生活は五年間。

#### 昭和四十八年（一九七三）（三十歳）

四月五日、石田吉貞先生、栗山理一先生の推輓により、塙選書の一冊として『芭蕉に「さび」の構造』（塙書房）を処女出版（書き下し）。担当編集者は、吉田嘉次氏。小西甚一著『日本文藝史IV』で、本書の「しほり」論についての言及がある。この書によって、昭和四十九年（一九七四）十一月、早稲田大学国文学会窪田空穂賞を授与される。また、『現代俳句大辞典』（明治書院）に本書が独立項目として立項収録される。

#### 昭和四十九年（一九七四）（三十一歳）

十月十二日、『芭蕉連句評釈——杜歳 連句抄』（雄山閣）出版。亡父

追善の書ながら、誤植多く、反省しきりの書。

### 昭和五十二年（一九七七）（三十四歳）

三月三十一日、福岡教育大学助教授を辞職する。

四月一日、静岡女子大学（県立）文学部国文学科助教授となる。静岡市瀬名の県職員宿舍に転居。

### 昭和五十四年（一九七九）（三十六歳）

四月五日、三冊目の著作、古川叢書の一冊としての『芭蕉の美意識』（古川書房）を出版。栗山理一先生に序文を書いていただく。「復本君の芭蕉研究は前著『芭蕉に「さび」の構造』のかたその主題は芭蕉の美意識やその形象美の究明にあり、本書はその続編ということになるう。宮々として倦むを知らぬ精進ぶりは多とすべきである」とお書き下さるも、雑纂的な一書となってしまうことに自ら不満が残る、これまた反省しきりの著作。

九月三十日、静岡女子大学文学部国文学科助教授を辞職する。

十月一日、静岡大学人文学部人文学科（国文学コース）助教授となる。一時、静岡市大谷の一戸建ての借家に転居後、静岡市小鹿の官舎に入る。静岡での生活は、十二年間。

### 昭和五十六年（一九八一）（三十八歳）

八月十日、講談社学術文庫の一冊として『鬼貫の「独ごと」全訳注』（講談社）出版。『独ごと』の全巻にわたって、はじめて訳注を施したもの（書き下し）。本書を執筆したことで、自らの俳論研究の方向が定まる。平成八年（一九九六）、七刷となるが、以後品切れ。

### 昭和五十七年（一九八二）（三十九歳）

六月二十日、編集に携わった『総合芭蕉事典』（雄山閣）刊。全体的な構成の礎案を作成。『芭蕉連句評釈』出版の縁をもつて、当時の雄山閣編集長芳賀章内氏に相談して実現した企画。監修者に栗山理一先生を仰ぐ。私以外の編集者尾形仿・山下一海両氏は、栗山先生が協力を要請されたもの。編者を除く項目執筆者は三十四名。使い勝手のよい芭蕉事典になったと多少自負している。「わび」「さび」「かるみ」等の項執筆。

七月七日、学士会館にて三島海雲記念財団研究奨励賞（金）を贈呈される。テーマは「鬼貫の研究」。

### 昭和五十八年（一九八三）（四十歳）

七月三十日、塙新書の一冊として『さび―俊成より芭蕉への展開―』（塙書房）出版（書き下し）。編集担当者は、吉田嘉次氏。

十二月十日、中田祝夫編監修『古語大辞典』（小学館）の「さび」の項を署名執筆。これにて、卒業論文以来十七年間にわたる「さび」研究が自分なりに一段落した。

#### 昭和五十九年（一九八四）（四十一歳）

六月二十日、角川選書の一冊として『笑いと謎―俳諧から俳句へ』（角川書店）出版。俳諧、俳句を貫通する特質を「笑い」と「謎」にあるとしたもの。本書ではじめて私の「藝」と「晴」の俳諧・俳句理論を公にする。時事通信記者藤田昌治氏のインタビューを受け、その記事が「著者と語る」として地方紙各紙に報じられる。「朝日新聞」の「読書」欄でも紹介される。

六月二十四日、清水市三保海岸の羽衣ホテルで、『笑いと謎』出版祝賀会を開いて下さる。発起人は、福井貞助・阿辻哲次・本宮鼎三氏等。上田五千石氏・櫻井武次朗氏・伊達百合氏等が出席下さる。

#### 昭和六十年（一九八五）（四十二歳）

三月三日、静岡大学人文学部にて静大俳句会創設、顧問となり「静大俳句」を創刊。毎年一回発行。編集の任に当る。第五号までかわる。

#### 昭和六十一年（一九八六）（四十三歳）

六月二十五日、エッセイ集『古俳書つれづれ』（東海美術社出版部刊）出版。題字を『伊勢物語』研究の第一人者福井貞助先生（当時、静岡大学教授）にお書きいただく。静岡時代の交遊録。

#### 昭和六十二年（一九八七）（四十四歳）

四月十五日、『本質論としての近世俳論の研究』（風間書房）出版。A5版、六百三十七ページ。俳論研究の集大成。俳論史に〈和歌離れ〉〈和歌一体化〉の視座を定めたことと、『去来抄』の江戸時代の新出注釈資料である田辺文里著『去来抄解』を翻刻紹介したことが特色か。

七月二十五日刊の日本の名随筆57、半村良編『謎』（作品社）の中に『笑いと謎―俳諧から俳句へ』所収の「謎の句」が収録される。半村良氏の編であることが嬉しかった。

#### 昭和六十三年（一九八八）（四十五歳）

四月一日、静岡大学人文学部人文学科（国文学コース）教授に昇任。

四月二十五日、『芭蕉古池伝説』（大修館書店）出版（書き下し）。芭蕉の〈古池や蛙飛こむ水のをと〉の一句を、多視点から探り、人気の秘密を明らかにせんとしたもの。東京都世田谷区立中央図書館にてテープ化される。

五月五日、『俳句読本』(雄山閣)出版。〈藝<sup>け</sup>〉と〈晴<sup>は</sup>〉を視座に置いての一書。俳人の上田五千石氏が裏表紙にコメントを寄せて下さる。

六月十四日、「本質論としての近世俳論の研究」によって早稲田大学より文学博士の学位を授与される。審査は、神保五彌教授・暉峻康隆名誉教授・堀切實教授・雲英末雄教授。

七月二十三日、静岡県職員会館(もくせい会館)において学位取得・著書出版の祝賀会を開いて下さる。発起人は、福井貞助・佐藤彰・上杉省和・寺田行健・島村正・宮地安雄・本宮鼎三の各氏。出席者は、上田五千石・坪内稔典・日野資純・鷺山茂雄氏等六十八名。

#### 平成元年(一九八九)(四十六歳)

三月三十一日、静岡大学人文学部人文学科(国文学コース)教授を辞職。

四月一日、神奈川大学経営学部国際経営学科教授に就任。八月二十日、静岡SBSテレビ「ふるさと人物誌・大須賀鬼卵」に出演。鬼卵の人物像について話す。

九月二十日、『俳人名言集』(朝日新聞社)出版。朝日新聞社の大峽弘通・小川特明・杉山正樹の三氏によって誕生した本。小川特明・杉山正樹両氏が出版祝いをして下さい。朝日新聞社の社旗はためく車に乗せていただくという経

験をした。この本は、平成四年(一九九二)十一月に朝日文庫の一冊に入った。

十月三十日、「アサヒグラフ」編『死を語る 死を想うⅡ』(朝日新聞社)の中にエッセイ「初孫の誕生を待ちに待っていた父である。夢から覚めて、涙が滂沱と……」が収録される。父の死について語ったもの。

#### 平成二年(一九九〇)(四十七歳)

四月五日、『俳句を楽しむ<sup>ハレの俳句</sup>』(雄山閣)出版。

#### 平成三年(一九九一)(四十八歳)

十一月二十五日、新潮選書の一冊として『俳句忠臣蔵』(新潮社)を出版(書き下し)。俳人として活躍した義士たちを追跡、検証したもの。千葉点字図書館において点訳される。本書の中で義士俳人の一人進歩を寺坂吉右衛門であることを検証。この点については、後日、平成六年(一九九四)の「歴史読本」(新人物往来社)一月号の「義士俳人としての寺坂吉右衛門」で補強した。本書について田中善信著『芭蕉の真贋』(ぺりかん社)、井上隆明著『東北・北海道俳諧史の研究』(新典社)等で言及され、各氏の見解が示されている。

平成四年（一九九二）（四十九歳）

三月一日、神奈川大学経営学部にて文科系の研究誌「麒麟」を創刊、十七号まで編集の任に当る。

十月二十日刊『俳句って何？』（邑書林）の編集に携わる。「あとがき」を「私は、異端の俳文学研究者であることを自任している」との一文から筆を起している。他の編者は、石寒太・嶋田麻紀・辻桃子・中原道夫の四氏。

十一月二十日、NHKブックスの一冊として『芭蕉俳句16のキーワード』（日本放送出版協会）を出版（書き下し）。担当編集者は、佐野八寿人氏。私の俳論研究の、芭蕉に焦点を絞つてのエッセンス。五刷までいく。比較的不特定多数の読者に読まれたようである。

平成五年（一九九三）（五十歳）

三月三十一日、神奈川大学経営学部にて「神大俳句」を創刊、毎年一回発行。十四号まで編集の任に当る。

四月一日より一年間、国内研修。俳句文学館にて日野草城の調査。

十一月十日刊『現代歳時記辞典』（北辰堂）の監修に携わる。五十音順の季語辞典。

十一月三十日、『日本の「創造力」⑭復興と繁栄への軌跡』（NHK出版）にて「俳句興隆に尽くした出版人角川源義」を執筆。

平成六年（一九九四）（五十一歳）

二月十日、同志社大学文学部一九九四年度入学試験問題の「国語」に拙論「謎の句」（『笑いと謎―俳諧から俳句へ―』所収）が用いられる。百五十点満点中、九十点の問題。

九月二十日、『プロアマオーブン平成大句会』（NHK出版）に「神奈川大学教授」（アマ）として俳句三句が収録される。同ページにプロ俳人三橋敏雄の句、三句。

十月二十日、『俳人たちの言葉』（邑書林）出版。先の著書「俳人名言集」と対を成すもの。

平成七年（一九九五）（五十二歳）

八月二十日刊『現代俳句ハンドブック』（雄山閣）の編集に携わる。他に編者として斎藤愼爾・坪内稔典・夏石番矢三氏の協力を仰ぐ。

八月二十九日刊『激論 俳句はどうなる』（愛媛新聞社）に執筆メンバーの一人として参加。他のメンバーは、篠崎圭介・高野公彦・坪内稔典・村上護の四氏。

平成八年（一九九六）（五十三歳）

八月二十日、夏石番矢氏と共編の「シリーズ俳句世界」の第一巻『エロチシズム』（雄山閣）が出版される。このシリーズはテーマ別の俳句雑誌。全八巻に別巻二巻。平

成十年（一九九八）四月に完結。毎回ゲスト編者を招いた。目玉は、ゲストを招いての鼎談（時に対談）。第一巻は、上野千鶴子氏。

十月二十日、『入門 芭蕉の読み方』（日本実業出版社）を出版（書き下し）。私の芭蕉の読みを示した本で、自分では気に入っているが、評判にはならなかった。

#### 平成九年（一九九七）（五十四歳）

二月十六日、NHK衛星第2TVの「週刊ブックレビュー」の特集へ「おくの細道」を読むに出演。司会、如月小春氏、アシスタント、小山裕香氏。

六月二十九日、NHK-FM放送「日曜喫茶室 梅雨空や笑いおかしみ余白の芸」に矢野誠一氏とともにゲストとして出演。他に安野光雅氏、はかま満緒氏、橋本尚子氏がレギュラー陣。

十月二十六日、善通寺市で行われた国民文化祭・かがわ'97の連句大会で記念講演（連句はどのようにして読まれたか）を行う。

十月三十日、『現代俳句への問いかけ』（邑書林）を出版。現代俳句に関しての、はじめてのまとまった著作。装丁、大いに気に入っているが、校正ミスが数ヶ所あるのが残念で仕方がない。

十一月十日、講談社選書メチエの一冊としての「芭蕉歳

時記 堅題季語はかく味わうべし」（講談社）を出版（書き下し）。担当編集者は、横山建城氏。有賀長<sup>あるがちようはく</sup>伯著「初学和歌式」（元禄九年刊）を翻刻、「本意」として示したところが眼目。「日本経済新聞」の書評欄にて佐佐木幸綱氏が評価して下さる。

#### 平成十年（一九九八）（五十五歳）

四月二十五日、邑書林句集文庫の一冊として編者『精選季題別芭蕉秀句』（邑書林）を出版。巻末に付したへ「おくのほそ道」全句鑑賞は、畏友、日刊建設工業新聞社企画局長高垣睦城氏の企画により同紙に連載したものの。

七月二十七日、「朝日新聞（夕刊）」の「テーブルトーク」欄に「ユートピア集団目指し超結社の俳句誌を発行」として登場。学芸部の記者内藤藤好之氏の取材。私が代表を務める実験的超結社俳句集団「鬼」の会（スタートは妙蓮寺俳句会の機関誌「鬼」の創刊は、本年五月一日。初代編集長は、北川素月氏、二代編集長は、榎未知子氏、三代編集長は、平千枝子氏。現在、二十二号まで刊行。私の俳号は、復本鬼ヶ城。

十月二十日、NHKライブラリーの一冊として『江戸俳句夜話』（日本放送出版協会）を出版。編集担当は、佐野八寿人氏。富山市立図書館にてカセットテープ録音化される。



平成十一年（一九九〇）（五十六歳）

一月一日、神奈川大学全国高校生俳句大賞の第一回作品集『17音の青春』（邑書林）刊。私は、宇多喜代子・大串章・金子兜太・川崎展宏・鷹羽狩行の各氏とともに選考委員として参加、コーディネーターを兼ねる。平成二十一年、十二回目を迎える。

二月十四日、「朝日新聞」にエッセイ「俳句を読む」（俳句時評）の不定期連載をはじめ。平成十三年（二〇〇二）二月十八日まで全十一回の連載。

四月十日、「芭蕉の言葉 去来抄新々講」（邑書林）を出版。『去来抄』中の「先師評」の注釈。かなり私見を提示し得たように思う。

四月十一日、NHK教育テレビの「NHK俳壇」（主宰宇多喜代子氏）に寺井谷子氏とともにゲストとして出演。司会は、小林照彦氏。

七月二十五日～七月三十日、東北大学大学院文学研究科国文学専攻にて「国文学特論Ⅲ」を講ずる（集中講義）。講義題目は「芭蕉における「本意」の超克」。仁平道明東北大学教授の招きによる。

九月二十二日、神奈川大学評論ブックレットの一冊として『俳句から見た俳諧 子規にとって芭蕉とは何か』（御茶の水書房）を出版（書き下し）。子規に関する最初の単行本。編集担当は、黒川恵子氏。

十一月二十日、講談社現代新書の一冊として『俳句と川柳（笑い）と「切れ」の考え方、たのしみ方』（講談社）を出版する（書き下し）。編集担当は、岡本浩睦氏。この本は、NHK衛星第2TVの「週刊ブックレビュー」で荻野アンナ氏が書評して下さったのをはじめとして「日本経済新聞」書評欄での佐佐木幸綱氏の書評等、多くのメディアが注目して下さり、私の著作としては、今までになく不特定多数の読者に読まれた本。福岡市立点字図書館にて録音図書とされる。俳句と川柳の違いを、「切れ」の有無の視点より論じたもの。俳句界、川柳界で論争が起る。只今、八刷。

平成十二年（二〇〇〇）（五十七歳）

一月二十八日、NHK第一「四国発ラジオ深夜便」にゲストとして出演。他に川本皓嗣・篠崎圭介・夏井いつきの三氏が出演。テーマは「俳句王国・松山を語る」。司会は、八木健氏。

三月二十七日、東京大学大学院総合文化研究科の博士論文（松井貴子氏「写生の変容—フォントネジ—から子規、そして直哉へ」）の審査委員の一人として、今橋映子・三浦篤・エリス俊子・川本皓嗣の諸先生と、東京大学駒場キャンパスの八号館三三四教室にての公開審査に参加。博士論文審査委員に推輓下さったのは、主査の川本皓嗣。東京大学教授（現大手前大学学長）。

四月十六日、NHK教育テレビの「NHK俳壇」(主宰大串章氏)にゲストとして出演。司会是小林昭彦氏。

六月二十六日、「俳句源流考―俳諧発句論の試み―」(愛媛新聞社)を出版する。A5判、八百八ページ。「発句とは何か」「俳句とは何か」を問いかけての、前著『本質論としての近世俳論の研究』以来の俳論研究の集大成。芭蕉判『十八番発句合』の新出写本、『去来抄』へ故実篇の新出写本を翻刻紹介し得たことは、研究者としてうれしいことであつた。朝日新聞社の内藤好之氏によれば、大仏治郎賞にノミネートされていた由。

十一月三十日、『俳句芸術論』(沖積舎)を出版する。構成も装丁も内容も、総て気に入っている評論集。

#### 平成十三年(二〇〇二)(五十八歳)

三月一日、俳誌「糸瓜」の別冊として「子規・松山発」を篠崎圭介主宰とともに編む。二十二名の方々に執筆を依頼。

七月一日、NHK第二「NHKカルチャーアワー」にて、本日より五回連続で「正岡子規の魅力―子規百回忌に寄せて―」を話す(午後八時より九時まで、毎日曜日)。

九月二十日、新編日本古典文学全集の一冊としての『連歌論集 能楽論集 俳論集』(小学館)が出版される。「俳論集」において『三冊子』の校注・訳を担当(書き下し)。

特に「赤雙紙」の構成上の読みに対して、従来とは全く異なる見解を示してみた。『去来抄』の校注・訳は堀切実氏の担当。

九月二十八日、NHK第一「四国発ラジオ深夜便」にゲストとして出演。他に坪内稔典・河野裕子・榎未知子の三氏が出演。テーマは「子規・ルネサンス」。司会は、板倉卓人氏。

十月十日、『知的に楽しむ川柳』(日東書院)を出版(書き下し)。一部分を前「オール川柳」編集長の新垣紀子氏に協力いたたく。四日市市立図書館点字図書館にてカセットテープ録音化される。

#### 平成十四年(二〇〇二)(五十九歳)

四月一日より一年間、国内研修。俳句文学館にて正岡子規の調査。

五月十日、生涯学習のユークキャン(U・C・A・N)の「俳句入門講座」監修者となりテキスト三冊を書き下す。

六月二十日、『正岡子規・革新の日々―子規は江戸俳句から何を学んだか―』(本阿弥書店)を出版する。

六月二十日、『佐藤紅緑 子規が愛した俳人』(岩波書店)を出版する。編集担当は、吉田裕氏。佐藤愛子氏より丁寧なお手紙をいただく。有馬朗人(共同通信系各紙)、眞鍋呉夫(「神奈川大学評論」)、佐藤愛子(「俳句」)、

和田克司（「文学」）、片山由美子（「鬼」）の諸氏が書評をして下さる。

十月二十五日、NHK第一「四国発ラジオ深夜便」にゲストとして出演。他に仲川幸男・新垣紀子・大西泰世の三氏が出演。テーマは「川柳改革一〇〇年」。司会は、板倉卓人氏。

#### 平成十五年（二〇〇三）（六十歳）

四月八日、編集に携わった『早引き俳句季語辞典』（三省堂）刊。ただし、編集というよりも監修といったかわりかた。

四月十二日より共同通信系地方各紙でエッセイ「俳句はいま」（俳句時評）の連載を月一回で開始。平成十六年三月まで。

四月十七日より評論「芭蕉をめぐる三十人」の連載を週刊「おくのほそ道を歩く」（角川書店）で開始。全三十巻。四月十八日、岩波テキストブックスの一冊として『俳句実践講義』（岩波書店）を出版（書き下し）。編集担当は、吉田裕氏。佐佐木幸綱氏が「日本経済新聞」にていちはやく書評して下さる。一ヶ月余で四刷という、私の本としては異例のスピード増刷。目下、七刷。

九月五日、還暦自祝としての『子規との対話』（邑書林）を出版する。邑書林の土橋壽子・島田牙城氏の御好意に

よるもの。

九月十九日、岩波ジュニア新書の一冊として『青春俳句をよむ』（岩波書店）を出版（書き下し）。編集担当は、堀内まゆみ氏。

十二月一日、今までの著作活動により、第九回横浜文学賞受賞。

#### 平成十六年（二〇〇四）（六十一歳）

三月二十日、『子規との対話』により第六回加藤郁乎賞受賞。

四月二十日、監修の『俳句の花図鑑』（成美堂出版）刊。

七月一日、芸林21世紀文庫の一冊として、編著『加藤楸邨句集』（芸林書房）出版。この書は、詩人宗左近先生の御推輓によるもの。

七月二十五日、監修の『季節のことば辞典』（柏書房）刊。八月八日、松山市立子規記念博物館において「子規と紅緑」を講演。

八月二十七日、佐佐木幸綱氏と共編の『三省堂名歌名句辞典』（三省堂）刊。編集担当は、松本裕喜氏。

九月十七日、編集顧問をつとめる「ユーキャン俳句倶楽部」創刊。今日に至る。

平成十七年(二〇〇五)(六十二歳)

一月二十日、講談社現代新書の一冊として『俳句とエロス』(講談社)を出版する。編集担当は、岡本浩睦氏。

四月十日、監修の『俳句の鳥・虫図鑑』(成美堂出版)刊。

四月三日、「産経新聞」(テーマ川柳)欄の選者となる。毎週日曜日(平成二十二年三月より火曜日に変更)。今日に至る。

六月四日、NHK教育テレビ「NHK短歌」に佐佐木幸綱氏のゲストとして出演。

六月二十日、『日野草城 俳句を変えた男』(角川書店)を出版する。編集担当は、倉敦子氏。

九月一日、佐佐木幸綱氏と共編の『三省堂名歌名句辞典』(三省堂)の「机上版」刊。

平成十八年(二〇〇六)(六十三歳)

四月一日、神奈川文学振興会の評議員となる。今日に至る。

四月二十五日、監修の『俳句の魚菜図鑑』(柏書房)刊。

七月三十日、青森近代文学館(総合社会教育センター)にて「正岡子規と佐藤紅緑」と題して講演。

十月七日、NHK教育テレビ「NHK俳句」に稲畑汀子氏のゲストとして出演。

十二月十七日、西田幾太郎記念哲学館にて「芭蕉と笑い

俳句における寂と滑稽」と題して講演。

平成十九年(二〇〇七)(六十四歳)

九月一日、弘前文化センターホールにて「陸羯南と正岡子規」と題して講演。その後の「人間陸羯南」をテーマとするフォーラムのコーディネーターとして、パネリストの竹田美喜(松山市立子規記念博物館館長)、鎌田慧(ルポライター)、本田逸夫(九州工業大学教授)の三氏にはじめてお会いする。

九月十日、『新・俳人名言集』(春秋社)を出版する。平成元年刊『俳人名言集』(朝日新聞社)を増補・再構成したものの。編集担当は、松澤隆氏。

十一月一日、青春新書の一冊として『日本人が大切にしてきた季節の言葉』(青春出版社)を出版する。担当編集者は、福田尚之氏。この書、多くの方々に読まれているようで、現在、五刷。『俳句と川柳』(講談社現代新書)を凌ぐ勢い。

十一月二十八日、『俳句の発見 正岡子規とその時代』(NHK出版)を出版する。担当編集者は、佐野八寿人氏。

平成二十年(二〇〇八)(六十五歳)

一月一日、文化庁平成二十年(第五十九回)芸術選奨推薦委員(評論等部門)となる。

五月五日、「朝日新聞」のへうたをよむ欄にエッセイ「寺山修司と母の五月」を書く。

六月二十日、監修の『早引き俳句用字辞典』（三省堂）刊。  
八月三十日、柿衛文庫にて「美しい季節の言葉―歳時記今昔―」と題して講演。

九月五日、『芥川龍之介全集』（岩波書店）第二十一巻の「月報」を書く。題は「子規は即ち昇らんとするの月」。

### 平成二十一年（二〇〇九）（六十六歳）

一月一日、昨年に続いて、文化庁平成二十一年（第六十回）

芸術選奨推薦委員（評論等部門）となる。

三月二十五日、『余は、交際を好む者なり 正岡子規と十人の俳士』（岩波書店）を出版する。編集担当は吉田裕氏。

三月二十七日、『復本 一郎芭蕉論集成 芭蕉との対話』（沖積舎）を出版する。編集担当は冲山隆久氏。

三月三十一日、神奈川大学（経営学部）を早期定年退職する。悔ゆることなし。